

ネバーランド (Finding Neverland)

2004(平成16)年12月17日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★★



監督＝マーク・フォスター／出演＝ジョニー・デップ／ケイト・ウィンスレット／ジュリー・クリスティ／ダスティン・ホフマン／ラダ・ミッチェル（東芝エンタテインメント配給／2004年アメリカ・イギリス映画／100分）

第3章

じっくり、じっくり

……1904年のロンドンでの『ピーター・パン』の初演から100周年。『ピーター・パン』の物語は、なぜ生まれたのか？ そして『ネバーランド』とは一体どんな国なのか？ ファンタジーの世界と「信じる心」を持ち続けた実在の人間たちの心の交流を温かく描いたこの映画は、涙の中、感動のラストへ！ 「この映画でジョニー・デップは最初のアカデミー賞を手にするだろう」との呼び声もわかつていうものだ。さて、あなたの「信じる心」はどれくらい……？

『ピーター・パン』とは？

1904年12月27日、イギリス・ロンドンのデューク・オブ・ヨーク劇場でジェームズ・マシュー・バリ原作の『ピーター・パン』が初演された。観客はほとんど大人だったが、この大人たちからもこの奇想天外な物語と演出は大好評を呼び、以降今日まで100年間にわたって全世界でその上演が続いているわけだ。その初演から100周年にあたる2004年は、イギリス議会の貴族院で「ピーター・パン百周年の宣言書」が宣言されるほど、重要な節目の年となった。イギリスにとっては、これほど長く広く愛されてきた国民的ヒーローがピーター・パンなのだが、果たして日本人のあなたは？

ピーター・パンとは？ ウェンディとは？ 妖精とは？ カギ爪のフック船長とは？ 巨大ワニとは？ インディアンとは？ そしてネバーランドとは？ これらについて一定の知識をもっていることがこの『ネバーランド』という映画を

楽しむための条件だが、果たしてあなたはどうか？ 日本でも、あのアイドルだった榎原郁恵がピーター・パンとなって空を飛ぶシーンは有名だろうし、誰だって子供の頃に1度くらいはピーター・パンの映画を観たり、絵本を読んだことがあるはず。したがってここではそれ以上の解説はせず、この映画についての評論を書き進めたい。

2004年に上映されたもうひとつの『ピーター・パン』

2004年という記念の年に、ソニー・ピクチャーズ エンタテインメントが、P. J. ホーガン監督のもとで製作した『ピーター・パン』を、私は2004年3月2日に観てその評論を書いた。そこに最小限の『ピーター・パン』の基礎知識を書いているので、もし情報が必要な方はそれを参照してもらいたい。このP. J. ホーガン監督の『ピーター・パン』は、アニメではなく人間の俳優が演じたものでそれなりに美しく楽しいものだったが、残念ながら私は十分満足できるものではなかった。それは多分、観る側すなわち私がいつのまにか年をとってしまい、いつまでも「少年の気持」を持ち続けることができなくなったためだろうと、少し残念に思ったものだ。

こんな戯曲、知らなかった！

この『ネバーランド』という映画の基になったのは、アラン・ニーの舞台劇『The Man Who Was Peter Pan (ピーター・パンだった男)』。この舞台劇は、『ピーター・パン』の劇が既に大人気を博していることを前提としたうえで、この劇が誕生するについての、劇作家ジェームズ・マシュー・バリとシルヴィアの4人の子供たちとの心の交流を描いたものらしい。パンフレットによると、この映画『ネバーランド』を製作したネリー・ベルフラワーは、アラン・ニーの舞台を地元の演劇講習会で観てすぐに映画化権を獲得し、そしてデイヴィッド・マギーがこの戯曲を脚本にしたとのこと。したがってこのマギーの脚本は、実際にバリが『ピーター・パン』の劇を書いたときの事実にもとづいているわけではないとのこと。しかしこの映画の出来に、この脚本のすばらしさが大きく寄与していることはまちがいない。単なるファンタジーとしてのピーター・パン映画では

なく、「舞台劇ピーター・パン」が生まれ大ヒットするに至った人間模様に焦点をあてた、この戯曲や脚本は実にすばらしいものだと感心！

バリの新作発表は大失敗！

この映画の主人公であるジェームズ・マシュー・バリ（ジョニー・デップ）は、既にロンドンでかなり有名な劇作家。1903年のある日、デューク・オブ・ヨーク劇場で初演されたバリの新作『リトル・メアリー』は大きな期待をもって迎えられたが、結果は散々。21世紀の現在のような「ブーイング」は出なかったものの、居眠りする観客が続出。翌日の新聞の酷評も当然で、バリにとっては何ともつらいこと！ そんなバリを支えたのは、バリに対してあてこすりの発言をしながらも、バリの実力を信じている劇場主のチャールズ・フローマン（ダスティン・ホフマン）。『リトル・メアリー』は打ち切りとなったものの、資金回収の必要性という現実的要請もあり、チャールズはバリに対して、「劇場も俳優もキープしているのだから、早く次の新作を！」と催促。果たしてそんなに早く、次の新作が完成するのだろうか？

4人の男の子の母親はそりゃ大変！

私の事務所にも男ばかり4人兄弟の末っ子で現在30歳手前という変わり種の若者(?)がいるが、戦前の「産めよ、増やせよ」の時代ならともかく、戦後の日本で男ばかり4人兄弟というのは珍しい。その点、19世紀中頃から20世紀初頭にかけてのイギリスではどうだったのかは知らないが、いち早く産業革命を成し遂げ、「大英帝国」として世界に君臨していた当時のイギリスには産児制限などなかったはずで、戦前の日本のようにたくさんの子供を産んでいたのだろう。長男ジョージ（ニック・ラウド）、次男ジャック（ジョー・プロスペロ）、三男ピーター（フレディ・ハイモア）、四男マイケル（ルーク・スピル）の母親シルヴィア・ルウェリン・デイヴィズ（ケイト・ウインスレット）は夫と死別し、その母親デュ・モーリエ夫人（ジュリー・クリスティ）の援助を受けながら生活しているらしいが、当時のイギリス女性としてはかなり変わった女性のように。母親の援助は最小限にとどめているようだし、誰かに頼って再婚相手を探すような雰囲気

も全くなし。逆に腕白ざかりの4人の子供たちと共有する時間を何よりも大切に、それを楽しんでいる。しかし子供たちの食事、洗濯、裁縫、掃除など、育児と家事をすべて自分で処理しているから寝る時間もないほど……。それはそれでいいのだが、あんまり無理をしていると、そのうち……？

バリと4人の子供たちとの交流

『リトル・メアリー』の失敗で落ち込んでいたバリは、今日も日課となっている公園の散歩へ。公園のベンチに座って、浮かんできた構想を書き留めることもしばしばだ。ところが今日はベンチの下に変な男の子が……。「僕の服をふんづけているよ」と注意されたバリが、「なぜ君はベンチの下にいるの？」と聞くと、何と「僕は今捕らわれの身になっている」とのこと。4人兄弟たちが楽しく「騎士ごっこ」をして遊んでいたわけだ。「少年の心」を持ったバリはたちまち子供たちの遊びの輪の中に入り、1日をこの公園で楽しく過ごすことに……。そして「明日もまた遊ぼうね」と言って別れたバリは、ここから4人の子供たちとの交流が深まっていくことに……。

その交流は大人の目には反社会的で、反道徳的

4人の子供たちとの「遊び」にバリは夢中だが、バリには当然妻のメアリー・アンセル・バリ（ラダ・ミッチェル）がいるし、4人の子供たちには母親のシルヴィアがいる。当初、社交界の名士であるシルヴィアの母親モーリエ夫人の名前を聞いて、彼女とお友達になろうとして、シルヴィアとその子供たちを夕食に招待したメアリーだったが、夕食の席でも無邪気に遊び回るバリを見て失望するばかりか、シルヴィアの家に入りびたるバリに対して変な嫉妬心も……。

他方、シルヴィアの母親モーリエ夫人も、夫と死別して再婚相手を探しているシルヴィアの家にもバリが入りびたり状態となることに対して明らかな不快感を……。さらに、いくら民主主義の国とはいえ、こんなバリと「4人の子供たちプラス母親」との、度を過ぎた交流に対しては世間も変な目を……。バリの周りにはそんな陰口でいっぱいになっていたが、それに気がつかないのは「子供の心」を持ったバリだけ……？

ピーター・パンのモデルは三男のピーター

子供はいつ大人になるのか？ それは昔から難しいテーマ。「あること」をきっかけに責任を持たされると、その瞬間に急に子供から大人になることもあれば、意識的に大人になることを拒否し続けることによって、ずっと子供のままでいることもある。「永遠に大人にならない少年、ピーター・パン」というキャラクターが、なぜこの映画の主人公バリの頭の中で創造されたのかを本当に学問的（心理学的）に考えていくと、それはすごく興味深いことだろう。

それはともかく、4人兄弟のうち長男ジョージ、次男ジャック、そして末っ子のマイケルは子供の遊びを純粋に楽しんでしたが、ただ1人その遊びの輪に入りたがらないちょっと変わった子が三男のピーター。彼は父親を早く亡くしたため、「早く大人にならなければ！」といつも考えていたのだった。そんなピーターに対してバリは、愛犬とのダンスだって信じれば楽しい人間と熊とのダンスに見えるんだということを示し、子供たちから拍手喝采を得た。そしてさらに、頭の中に描いたことを1冊の革のノートに自由に書き留めることをピーターに薦めることに。そんな中、ピーターの心は少しずつ開かれ、「夢みる心」も開放されていくかにみえたが……。

バリが信じている「ネバーランド」は当然空想の世界。だからそこには、バリが頭の中で想像するありとあらゆるものが存在するけれども、妻のメアリーからネバーランドに連れていってくれと頼まれてもそれはムリ。さて本当に、信じれば必ず行けるといふ、すべての夢が叶うような世界はあるのだろうか？

思わず対比、ジェームズ・マシュー・バリと浅利慶太氏

この映画では、4人の子供たちとの遊びと会話の中からインスピレーションを得たバリが、きわめて短期間で『ピーター・パン』の台本を製作したことになるが、それはあくまでこの映画のストーリー構成上でのこと。演劇の台本を完成させ実際にそれを上演するまでには、大道具・小道具の準備から俳優集めそして舞台稽古にいたるまで、膨大な準備が必要なことは当然。

この『ネバーランド』における4人の子供たちとの交流をきっかけとした『ピ

ーター・パン』の台本づくりを見ながら私が思ったことは、『李香蘭』『異国の丘』に続く、「昭和3部作」の第3作目にあたる『南十字星』を、2004年9月12日、東京浜松町の四季劇場「秋」で初演させた、日本で今をときめく劇団四季の芸術総監督の浅利慶太氏のこと。『南十字星』は、『キャッツ』はもとより『ライオンキング』や『アイダ』などのもともと劇場公演向けのミュージカルではなく、まさに「昭和3部作」と名付けられているとおり、一定の史実を基にしたうえで、浅利慶太氏の全人生観を直接ぶつけその可否を世に問う作品。1つの演劇を製作することがいかに大変かということはこの例を見てもよくわかるが、1つの作品が100年間も生き続け、上映され続けるというのはまさに奇跡としかいいようがないもの……。

ジョニー・デップの静かな熱演に拍手！

「この映画で最初のアカデミー賞を手にするだろう」と評されているジョニー・デップは、この映画ではいつまでも「少年の心」を失わず、ついに『ピーター・パン』という奇想天外な演劇を完成させる主人公バリを実に見事に演じている。ジョニー・デップの代表作は、何とも個性的な海賊ジャック・スパロウを演じた『パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊たち』(03年)で、その印象は今でも強く残っているが、最近の『シークレット・ウインドウ』(04年)ではこの海賊とは全く異なる、二重人格の陰鬱な作家モート・レイニーを演じて、これも印象に残ったもの。そして、この『ネバーランド』では……？

この映画では、ジョニー・デップに特別な活躍シーンが用意されているわけではない。現実のストーリーと空想のお話をオーバーラップさせながらストーリーを展開させていくこの映画でのジョニー・デップの登場シーンは、そのほとんどがイギリス紳士風に正装してやさしく会話するもの。もちろん「少年の心」に戻ってインディアンになったり、フック船長になったりするバリの姿が登場するが、これは夢の世界へ移行するについての橋渡しのもの。あえてハイライトシーンといえば、さまざまなストーリーの積み重ねの上にやっと「ネバーランド」の国がスクリーン上に現れ、その中にピーター・パンやウェンディ、そして妖精、フック船長たちが登場するシーン。これこそバリが頭の中で描いている夢の世界な

んだということが一気に観客に示されるこのシーンは感動的だが、そのような感動を多くの観客に与えるのはジョニー・デップの見事な演技によるところが大きいことは明らか。全く異質のさまざまなキャラクターを完璧に演じるこのジョニー・デップという俳優に対して心からの拍手を送りたい！

これで、『タイタニック』のローズから脱皮・決別

この映画で、ピーターを含む4人の男の子の母親役シルヴィアを演ずるのはケイト・ウインスレット。あの『タイタニック』(97年)のローズ役でレオナルド・ディカプリオと共演し、大ブレイクしたイギリス生まれの演劇一家の女優。イギリスにはよく彼女のような演劇一家の女優がいるが、それはやはりシェイクスピアを生んだイギリスの文化水準の高さを示すもの……？ローズ役も良かったが、どちらかといつこの役は、その豊満な肉体が売りモノという感じ(?)で、「演技派」というイメージは少ないものだった。しかしその後、私が観た彼女の出演作である『キルズ』(00年)、『エニグマ』(01年)、『ライフ・オブ・デビッド・ゲイル』(03年)では、まさに演技派女優としての本領を見せており、私にはこれらの映画の方が興味深い。そんなケイト・ウインスレットは1975年生まれだから既に30歳近くになっているが、この映画では、夫と死別し4人の男の子たちの世話で日々「格闘」している母親役を演じている。映画の冒頭は、腕白ざかりの男の子たちを公園に連れて行って楽しく遊んで過ごすという幸せそうな母親だったが、途中からはヘンな咳が……？幸せ一辺倒では映画のストーリーは成り立たないもの。このシルヴィアの身体におこった異変が、その後の人間たちの心の交流と感動のドラマを生んでいくことに……。

こんないい作品といい役に恵まれたのだから、いよいよこれでケイト・ウインスレットも『タイタニック』のローズの役から脱皮・決別して、演技派大女優への道を行んでもらいたいものだ。

2人の名脇役にも大きな拍手を！

この映画は、感動作ながら1時間40分と割と短いもの。それは、1つ1つのシーンをくどくどと解説的に表現せず、印象的なシーンをしっかりと示すことによ

って一気に観客に理解させるという手法をとっているため。そしてその狙いがこの映画のストーリー展開をすごくリズムよくしている。そしてそれに一役買っているのが、2人の名脇役。

その1人は劇場主のチャールズを演じるダスティン・ホフマンで、出番は少ないもののその存在感はさすが。劇場王としては、バリの能力を信じながらも、劇場への観客の入りや劇場経営のことを考えるのは当然。そんなチャールズはバリの要請した25人分の席を本当にキープするのだろうか？ そして、上演寸前まで埋まらなかったこの25人分の席には一体誰が……？

他方、『ドクトル・ジバゴ』（65年）や『華氏451』（66年）で名演技を見せた、かつての人気女優ジュリー・クリスティはシルヴィアの母親モーリエ夫人役として登場している。4人の子供たちを媒介としたシルヴィアとバリの交際を心良く思っていないモーリエ夫人は、ことあることにバリと対決。シルヴィアの重い病気を隠されていたと思い込んだモーリエ夫人の口から、絶交宣言まで飛び出す始末。既に死期に至ったシルヴィアを取り囲む子供たちやモーリエ夫人に対して、「信じる心をもった人は大きな拍手を！」と呼びかけるピーター・パンの声に最初に手をたたいたのは……？

映画の完成度を高めるについて、脇役の果たす重要性をあらためて痛感！ この2人の名優にも大きな拍手を送りたい！

これぞネイティブ・イングリッシュ！

この映画で語られる英語のセリフは、ジョニー・デップ、ケイト・ウィンスレットをはじめ、子役たちも含めて正確にはよくわからないものの、私には「これぞネイティブ・イングリッシュ！」という印象が強い。主演のジョニー・デップはこの映画では、一貫してクールでおさえた演技に徹しているからそのセリフも静かで穏やかなものが多く、いかにも英国紳士的なもの。19世紀末から20世紀初頭にかけてのイギリス紳士はみんなこんな雰囲気だったとすれば、やはりイギリスはもともと民主主義の先進国……？ それだけに彼の口から話される英語の発音が目立つわけだが、その発音は何とも美しく、私にもかなり理解できるようなもの。アメリカのハリウッド映画での「ファック、ユー！」「スノバビッチ」を

はじめとする各種のスラングや、ナマリそしてたくさんのキタナらしい言葉になった私の耳にはこの映画でのセリフは非常に美しく新鮮に聞こえてきた。乱れた日本の文章やワケのわからない日本語の会話が氾濫している現在の日本では、「美しい日本語への回帰」という観点からも、この映画による英語のリスニングが有効だと私には思ったが……？

「信じる心」「信じる力」というテーマは永遠！

バリ原作の『ピーター・パン』という演劇が100年間も全世界の人々から愛され続けたのはなぜか？ それは私の見解によれば、子供なら誰もが持っている「夢見る心」「信じる心」そして「夢見る力」「信じる力」をテーマとし、それを最大限追求したものだからだ。これらをテーマとした映画や演劇はたくさんあり、感動作も多い。たとえば、スーパー歌舞伎『新・三国志Ⅱ—孔明篇』は、孔明の理想とした「戦乱なき世」、そしてそれを「夢見る力」をテーマとしたものだし（『シネマルーム5』151頁参照）、ティム・バートン監督の『ビッグ・フィッシュ』（03年）は、お話好きの父親が語る「夢物語」と現実派の息子との葛藤の後に信じられないような感動のラストを迎えるものだった（『シネマルーム4』280頁参照）。

そしてこの『ネバーランド』は、信じる力さえあれば何でもそれを現実のものにすることができるのだということを本当に感動的に描いた作品。したがって「この映画でジョニー・デップは最初のアカデミー賞を手にするだろう」という宣伝文句にも、全然違和感がないほどの出来。もちろん現実には、人の生死は人間の力ではどうしようもないもの。「不老長寿」を夢見た秦の始皇帝をはじめとする多くの権力者たちのその夢は叶わないものだったし、この映画でもヘンな咳をしていたシルヴィアは、ピーター・パンが登場する夢の感動劇を観た後やはりあの世に旅立つことに。しかしそうであっても、三男ピーターの心の中にはずっとシルヴィアは生きており、その目には今もシルヴィアの姿が見えるのだった……。 「信じる心」「信じる力」というテーマは永遠のもの。そしてこんな感動的な映画が私は大好き！

2004(平成16)年12月18日記